

神楽坂裏道散策“半日観光”

(東京都新宿区) 神山清英

期 間：2013年2月12日(火) 半日帰り
参加者：28名
費用：500円(通信費、書類送付代など)
現地集合、解散のため交通費は各自負担
役 割：リーダー神山清英、サブリーダー小澤信也

築土八幡神社前での記念写真

出発してから1時間、高台にある社殿の前での撮影です。30名弱の集団は壮観でした。



順路 現在の地図と幕末の地図

現在の地図での順路



幕末の地図で辿った順路(現在の道路とよく似ている)



ワールドステイクラブ らしさを出す

順路は、前半の大回りコースと後半の小回りコースに分かれていて、これをほぼ一筆書きで散策しました。所要時間は、それぞれ1時間半程度でした。

神楽坂付近について既に知識を持っていらっしゃる方が参加されていること、ワールドステイクラブらしさを出すために散策順路での説明内容に工夫をしました。そこで、幕末の地図と照らし合わせながら歩くことにしました。これにより、町並みの変化を知ることができ、逆に神社仏閣が同じ場所にあり町並みの「へそ」になっていること、道幅が幕末とほぼ同じようなところが多々あることを実地散策で体験しました。

台地での発展

神楽坂を含む地域は、古くから牛込7カ村の一つといわれています。山手線に駒込駅というのがあり「駒」つまり馬に関わる地名ですが、同様に牛込は「牛」に関わる地名です。古来、牛や馬は大変貴重な財産であり、これを養うことができる台地は大切にされたようです。

神楽坂付近は台地の上に、住みやすさ

から人家が集まり、それゆえに戦国時代には関東武士団が大いに活動していたようです。そうすると、往来の道ができてきますが、台地の裾を巡る道が自然にでき上がり、それが現在まで連続と続いています。一方、台地間の谷筋を横切って向こうの台地に渡る上り下りの坂道があります。ですから、神楽坂は坂が多いといわれますが、自然の地形に根ざしたものでこれを実感しました。

神社仏閣と武家屋敷

散策の順路は、幕末の地図にも記入してあります。この地図で見ると、神社仏閣名（〇〇宗〇〇寺）と武家屋敷名（〇〇彦左衛門）が記載されていて、当時の様子がより想像しやすくなります。福井県小浜藩の酒井修理大夫の広大な屋敷跡、講談でお馴染み一心太助に登場する大久保彦左衛門が引退後住まった慎ましやかな屋敷跡などがあり、古地図での発見になりました。

色分けされた幕末地図を見ると、神社仏閣と武家屋敷がざっと土地の8割を占めています。そうすると士農工商といわれる町人である工商は、残りの2割に軒を接して住んでいたことになります。随分窮屈だったろうと思います。また、江戸全体は幕府の置かれた地ですので、武士、つまり男だらけの社会だったこともあわせて実感されます。

古い町名

この付近の町名には江戸時代から変わらず続いているものが多く残っています。町筋を散策しながら、実地踏査で確認しました。

第1は、江戸幕府の武士の役割から命名された町名です。「納戸町」は幕府への物品の受領、「払方町」は幕府からの物品の払い出し、「鷹匠町」は鷹狩りの鷹を幕府に提供、それぞれの役割を持った武士が住まっていたところです。当時のままのやや細い道をたどり、そのころの様子を想像しました。

第2は、土地の役割から命名された町名です。JR飯田橋駅付近には揚場町という町名がありますが、江戸時代は水運が物資の主な運搬手段でしたので、神田川に続くその場所は、物資の集散の役割、つまり荷揚げ荷降ろしの重要な場所だったからです。台地の上からその場所を見下ろし、今でもなるほどそうかなと往時の賑わいを考えてみました。「船河原町」がありますが、これも地形から判断すると容易に想像できる町名です。

第3は、縁起を担いだりしたことから命名された地

名です。「白銀町」は、江戸時代の町づくりに際して、もっと金持ちになれよと願いを込めて命名されたそうです。赤城神社に続く高台にあり、現在はなかなかの住宅のたたずまいを見せています。

今回の散策での発見

散策した場所と現在での見所の大半は、この企画のご案内に記述されていますので、実地に散策した皆様に興味を示した個所を少々紹介します。

江戸時代の打ち首の罪人には市中引き回しをしましたが、その道は神楽坂につながる道を通っていたことです。現在でもその道幅は変わらずあり、今となっては狭い感じがしますが、ここが当時の主要道路の一つと道路への役割期待の現在との違いを実感しました。

狭いといえば、尾崎紅葉の寓居がある道筋も同様です。江戸から明治にかけては、そこが主要道路でしたので、決して奥まった所に引き込んでいたわけではないということがわかります。これなど、実地に歩き古地図を頼りにすると発見できる、ささやかな楽しみです。



築土八幡神社への登り口

赤城神社と築土八幡神社はともに台地に建っていますが、これを一たん谷筋である低地に降りて辿ると、高低差があることもあわせて大変な距離になります。けれど、台地に自然発生的にでき上った道をたどりその二つの台地間を移動すると、さほどでもありません。赤城神社裏の家屋と家屋の間の細い路地よりの道を辿り、これを実感しました。

大久保通りに路面電車が走っていたころの話です。13番の都電が主要な交通手段として、新宿から秋葉原経由水天宮までを結んでいました。神楽坂上から飯田橋へ抜ける道は谷筋と台地を縫う経路で、ここには横道が何本も出ていることへの疑問です。実は、この横道が江戸時代の本道でして、都電が走っていた太い道

路である大久保通りが、明治末から大正にかけて市街整備されたときに分断された道です。

神楽坂の上に行元寺跡がありますが、その市街整備で分断され移転を余儀なくされたようです。つまり、このお寺を二分するように大久保通りが計画され整備されたのです。もっとも移転した跡には、柳家金語楼が主催する金語楼プロダクションができ、一世を風靡しました。ロカビリー歌手山下敬二郎もこの地で育っています。こんなことを、跡地に掲示された由来書き看板で確認しました。

散策を終えて

降雨にならなかったものの、決して恵まれた天候とはいえませんでした。皆様は最後まで興味を切らさず熱心に参加されました。企画した側としては、大変嬉しくよかったなどの思いでいっぱいです。予想以上に参加者数が多く、全員に声が届かなかったのですが、それを許容してくださったことにも感謝しています。

この企画のきっかけは、幕末の地図を手に入れることができたことにあります。試みとして時代を遡りながら案内をすることにしました。幕末から明治・大正への変化を、伝聞を含めお伝えできたので、少々お役に立てたかなと自負しています。また、祖父母の時代から神楽坂近辺に住んでいたのです。このようなことができたことも確かなので、私のご先祖さまに感謝です。

楽しい雰囲気になるよう、参加者の方々がお互いに心配りをしてくださったことに感謝したいと思います。

最後に、散策終了後の有志参加の懇親会は、20名の方が参加されました。神楽坂下の居酒屋さんの一角を5時から2時間占領しましたが、これもまた賑やかな飲み会でした。顔なじみのお知り合い同士で席を同じくする、安心感のある雰囲気、これがワールドステイクラブならではの特色と思います。



赤城神社の境内

神楽坂散策に参加して

何人かの方々に感想文をいただきましたので、到着順に掲載いたします。(一部文章を割愛しています)

(静岡市) 宝田正志

神楽坂はこれまで商店街の連なる外堀通り側の坂下から坂上までの本通り以外はほとんど知らない街並みでした。しかし以前から何か三味線の音色が聞こえてきそうな裏通りを一度散策してみたいと思っていたところでしたので、今回の企画は絶好の機会となりました。

綿密かつ厳選された散策ルートの設定、現代と江戸時代の古地図を対比した案内図、理事長自身の故郷の地でもあり祖父母から伝え聞いた地域の昔話や図書館で調べ上げた話などを織り交ぜての街並み散策は、歴史のロマンに想いを馳せるに足る至福のひとつでした。



袖擦り坂の狭い階段

時代の流れによって林立する高層ビル群の中にあって、ひっそりと佇む花街や黒塀の数奇屋風の家が連なる石畳の小路、地域の所々に鎮座する神社仏閣の境内、武家屋敷が繋がっていたという鍵型小路の数々など、町名と小路を昔のまま残そうとされた地域の先人達の想いも伝わってくる旅でした。

(東京都杉並区) 山地紘子

生まれは牛込区西五軒町 32 番地。生粋の江戸っ子の祖父以来親族全員が神楽坂近辺に住んでいました。

祖父は染織業を営み、学校の運動場ほどの土地は“張り場”と称し反物の干場があり、いつも神楽坂の置屋から注文の染めた着物が一面に干してあったのを覚えています。今も親族が集まると、懐かしさと思い出で話題になる神楽坂です。

大江戸線を境に上半分、人1人やっと通れる横道、坂道を巡りながら善国寺毘沙門天で休憩をとり、さらに下半分を巡りました。

伯父一家が住んでいた矢来町、従兄弟姉妹が通っていた津久戸小学校が懐かしく思い出に残っています。何よりも嬉しいのは、子供時代の口癖の地名がそのまま守り残されていて、1丁目、2丁目などと聞かなくて良かったと嬉しく思いました。神山さんの博学多才な説明を堪能しながら有意義な半日でした。

(船橋市) 田辺年隆

当日は晴れてはいるが寒く、夜には雨が降る予報でした。神山さんが案内人を務められ、最初に駅で概要を話され、ますます興味がわく。資料は現在の地図にルートマップ、江戸時代の古地図を利用して、江戸以降の明治・大正・昭和の文人の旧宅、神社仏閣や地名のいわれなど、エピソードを交えて紹介、果ては田中角栄元総理の妾宅まで案内していただいた。実に博識、幅広い分野を教授いただき、そんなに広くない街を終わってみれば、1万歩を優に超えた散策でした。

特に興味があったのは神楽坂芸者のことで、見番は2つあり、当時の政治の流れを見聞きしてきた料亭の歴史を垣間見た気がした。狭い路地にひしめく高級料亭は、小生など庶民には程遠い世界で、想像するにも難しい感がある。

ひとつ気になったのは、江戸時代から幕府の戦略として大通りでも今の普通車がやっと通れる道幅であるが、狭い路地の多い街で火災の折にどう考えていたのか。江戸の大火は聞き及んでいるが、現代のようなこの家屋に消火設備もなく、木造がほとんどの家屋を占めている時代に火消しだけが勇ましく伝え聞いているが、具体的な延焼・類焼対策をどのように考えていたのか知りたいところである。

(東京都練馬区) 本杉康寿

江戸時代の雰囲気をも分に残した界限や、著名な方々の営みが残る場所を訪れ、神楽坂がますます魅力的なものとなりました。日本の新劇の発祥の地となった「藝術倶楽部」が、WSC事務所の近くであったことには気が付きませんでした。ここの一室で、妻子と大学教授の名誉を捨てた島村抱月がスペイン風邪から肺炎を患って病死しています。抱月に家族を捨てさせた松井須磨子は、後を追うように2カ月後にここで自殺を遂げています。昔、「カチューシャの歌」を歌っていた母のことが思い出されました。

兵庫横丁の奥の粹な黒塀に囲まれた小さな旅館、「和可菜」は久しぶりに訪れました。女優の小暮三千代の妹さんが守っている旅館です。かつて作家や脚本家の「ホン書き旅館」、いわゆる「カンズメ旅館」として有名だったところ。野坂昭如、色川武大、山田洋次、早坂暁、深作欣二、滝田ゆう等多くの方が使ったと聞いています。大田南畝、夏目漱石等の足跡を辿って、この神楽坂界限散策の続きを楽しみにしているところです。



兵庫横丁の雰囲気

(東京都杉並区) 安村恵子

30名近い皆様達と肌寒い冬の半日近く、神山リーダーのきめの細かい解説を聞きながら、まだまだ昔の雰囲気が残っている神楽坂の町を4時間かけて歩き、たくさん神社仏閣があるのに驚き、それぞれに手を合わせ、迷路のような道をくまなく歩き著名人の家跡、はなやかな時代の料亭、旅館、芸者さんの見番所等探訪しました。

昔の地図と変わらずに今も使っている道とのこと、昔のままの風情ある地名、昔のよき時代の神楽坂を案内していただき満喫して参りました。

余韻の残りをもって皆楽しくビールに舌鼓を打って解散しました。神楽坂にお住まいの神山リーダーでなくては、こんなによく神楽坂の街を散策はできなかつたと思います。

(東京都世田谷区) 池田昭

江戸時代後期の神楽坂は、右手（北東側）旗本、御家人屋敷、左手（南西側）は暖簾が掛った商家が並ぶお堅い街並みだったようですが、明治以降は町人の町となり、その雰囲気から文人、文化人に愛され、商業の発展とともに花街も発展しました。大正12年の関東大震災では神楽坂は火災を免れ、さらに賑わいを増したとのこと。昭和5年頃の夜の神楽坂は、縁日を

楽しむ人で溢れ、その人波に揉まれながら芸者衆が座敷に向かう神楽坂ならではの風景が見られたそうです。

昭和 12、3 年頃の花柳界全盛期には芸者 600 人以上がひしめいていたそうですが、昭和 18 年芸妓たちは飛行機の部品作りに動員され、昭和 20 年 4 月 16 日と 5 月 24 日の東京大空襲で焼野原となりました。

戦後は比較的早くから老舗の商店や飲食店が復元し、また新規参入も加わって現在の独特な町づくりが出来上がりました。創業 5 代目の店主たちが伝統保全に気を使ったので、老若男女、どの訪問者にも優しい雰囲気を感じられ、ウィンドーショッピングの流れが絶えません。花街の方は最盛期の 10 分の 1 以下になりましたが、芸妓 30 人、料亭 10 軒ほどが復活し、観光の目玉になっています。

さらに特筆すべきは、寺院や城下町特有の入り組んだ横道、裏道が江戸古地図に示された通りに残っています。リーダーの案内で周辺地域を散策すると新たな発見と驚きの連続です。今回の「神楽坂の情緒と歴史を探訪する裏町散策」は、まさに「関心、感動、感謝」の旅でした。WSC とのつながりが深い神楽坂界隈の歴史と発展には以前から関心がありましたが、現地の説明を受けると江戸・明治・大正が目の前に迫ってきて感動しました。

(東京都杉並区) 國分光洋

“黒塚の 枝ぶり伸ばす 梅の花”

神楽坂界隈を神山さんの案内で久しぶりに歩きました。出版企画の仕事をしていたので新潮社の編集者と夜な夜な飲み歩き隔々を知ったつもりでいきました。が、実際のところ地図を頼りに歩くと別の世界です。

古地図を見ると三業地である神楽坂は神田上水に沿って賑わう街だとわかります。現在ある筑土八幡は江戸古地図では津久戸八幡と記され、敷地内に筑土明神があったようです。今は近くに津久戸という名を残した小学校があり子供達の元気な声が聞こえます。

この江戸の町は世界に誇る百万人の大都市で、治安を北町奉行 12 人、南町奉行 12 人で仕切る世界一安全で清潔な都市でした。

画家のゴッホは庭先の小さな梅の花が宇宙と通じている浮世絵の秘めたる魅力に夢中になり、素晴らしい江戸文化に憧れたのです。往時の匂いを残す神楽坂の、そのところを逍遥した楽しい旅の一日でした。

神楽坂を歩いて、暖かい冬の日、神楽坂の街に足を踏み入れました。本で見た、映像で見た、石畳や粋な黒塚が続く情緒豊かな街並みが現れます。表通りからは、垣間見ることのできない神楽坂を見たいものとの思いが、この度地元の歴史家、神山さん小澤さんによって大きく開けました。

ここは名高い東京の花街として古くは江戸時代(1730 年頃)から岡場所があったといわれ、明治に入って花柳界となり栄えたと、牛込界隈に住んでいた、夏目漱石が随筆の中で記しています。

風情ある地名の由来は、説がいろいろあるようですが、いずれも祭礼で神輿が神楽を奏するから、若宮八幡の神楽が坂まで聞こえるから、など興味のある話ばかりでした。また、華やかな反面、文学的雰囲気も濃い所でありました。たくさんの著名な作品にこの地名の描写がなされています。尾崎紅葉がここで『金色夜叉』を発表したこと等、身近に感じられました。

忙しい紀行でしたが、内容には満足しています。東京のふるさと神楽坂、次の機会には「志満金」で、うなぎを食って名の知らない小さな居酒屋で、あるじ相手に、お湯割りを舐めながら、うろ覚えの神楽坂の雰囲気を回想したいと思っています。

(写真提供：小沢信也)